福井大学リポジトリ
UNIVERSITY OF FUKUI REPOSITORY

Survey of Kan-Sei (Aesthesia) and Competency in Art Education ---Comparative Study of the Concept of Competency between Japanese Art Educators and Art Educators in other countries

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池内, 慈朗, IKEUCHI, Itsuro メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/1896

美術教育における感性とコンピテンシーについての意識調査

ー日本人と外国人のコンピテンシーに関する比較調査からー

池　内　慈　朗

（2008年９月30日受付）

Survey of *Kan-Sei* (Aesthesia) and Competency in Art Education
---Comparative Study of the Concept of Competency between Japanese Art Educators
and Art Educators in other countries

IKEUCHI, Itsuro

１、はじめに

本研究は、小・中学校の美術教師、大学で美術教育を研究する教員らが、「コンピテンシー（能力観）」についてどのように考えているのか、美術の授業で養われる「能力（コンピテンシー）」についてどのようなものが必要なのか、日本の美術教育者と外国の美術教育者とのとらえ方の違いについて survey を実施し、それらを分析をもとに「感性」について考察したものである。

OECD（Organisation for Economic Co-operation and Development 経済協力開発機構）による、義務教育終了時の生徒の知識・技能を修得しているかを測る目的で行われた PISA（the Program for International Student Assessment）調査をうけ、日本においても理数的な教育リテラシーの重視にあてられてきた。PISA 調査は万能な計測ではなく OECD は、DeSeCo（デセコ： Definition & Selection on Competencies の略）を設置した[1)]。DeSeCo の活動は「うまくいく生活とよく機能する社会に貢献するコンピテンシー」に的を絞ったが、それだけでは充分でなく曖昧な部分も多く問題が残っている。著者は、これまでに PISA 調査で測れない、人間の発達や社会での営みをカバーするキーコンピテンシーの概念を、学校教育の中で美術教育の果たせる役割は、どのようなものがあるのか、美術教育の存在意義にまで及ぶと思われるコンピテンシーを、様々な角度より模索し研究を行ってきた[2)]。

２、先行研究

文部科学省の新指導要領が2008年３月に提出された。新指導要領には、「感性を働かせて」という表現が見られるようになり、美術の領域で「感性」が日の目をみるようになったといえよう。

しかしながら、「感性」には、明確な定義もなく、「群盲、象をなでる」のごとく、感性のとらえ方には個人差がある。美術教育における感性について、愛知教育大学のふじえみつるは研究を進め、最近の研究では、美術におけるコンピテンシーの問題に美術教育における能力観から分析を加えている[3)]。

また、DeSeCo の定義[4)]などあいまいな部分がおおく、アメリカの諸スタンダードなど参考にした質問の項目を作成し、InSEA（国際美術教育学会）大阪大会[5)]において、国内外の美術教師・美術教育研究者を中心にアンケートなどから「感性とコンピテンシー」について Survey を行うにいたったのである。質問事項を作成する上で、参考にしたのが、以下の２つの研究での質問項目である。第一は、ふじえを中心とした、オハイオ州立大学のエフランド、徳雅美氏を研究協力者として行った、日米比較を通した学力研究[6)]での調査項目であり、第二は、ゲッティ教育研究所が作成した基準準拠のカリキュラム開発ガイドとしての「能力分野」（”Scope and Sequences Coded to the National Standards”）である[7)]。

３、Survey の実施

Survey は、2008年８月５日から、2008年８月10日に開催された InSEA（国際美術教育学会）大阪大会の期間中に行った。被験者は、InSEA（国際美術教育学会）大阪大会に参加された日本人18名と海外（外国人）９名であった。職種は、日本人の美術教師、大学・短大で美術教育を教える研究者および、海外から参加された外国人の美術教師、大学・短大で美術教育を教える研究者であった。アンケートでは、12項目の質問に対して必要性の程度をａ（あまり必要ない）から、ｂ（どちらでもない）、ｃ（かなり必要）、ｄ（絶対必要）の４段階で該当するものにチェックをいれてもらった。

12の質問は、１.美術製作の技能を高める　２.美や感受性の自覚を高める　３.視覚文化への自覚を高める　４.創造性を高める　５.美術（作品・制作）との出会い　６.美術製作における材料・技法　７.美術における批評能力を高める　８.美術作品の解釈　９.美術作品に関する歴史的・文化的な理解　10.美術における様式・影響関係と主題　11. 自国の美術と外国の美術の理解　12.空間での問題解決能力を高める、である。

また、記述式の問いで、「２.上の質問以外で、学校の造形美術の学習で獲得するべき「能力（コンピテンシー）」に関して、あなたの考えを述べてください。」という質問も用意した。

結果を研究参加者全体から分析してみたものが表１である。各項目ごとのパーセンテージで示した。表２は、12項目を、棒グラフにしたものである。系列１はａ（あまり必要ない）、系列２はｂ（どちらでもない）、系列３はｃ（かなり必要）、系列４は、ｄ（絶対必要）である。

表１．美術で養われるコンピテンシーの必要程度（全体）ｎ＝27人

必要の程度／コンピテンシーの種類	a（あまり必要ない）	b（どちらでもない）	c（かなり必要）	d（絶対必要）
1.美術制作の技能を高める	3.7%	14.8%	55.5%	25.9%
2.美や感受性の自覚を高める	0%	7.4%	51.9%	40.7%
3.視覚文化への自覚を高める	0%	11.1%	59.3%	29.6%
4.創造性を高める	0%	0%	48.1%	51.9%
5.美術（作品・制作）との出会い	0%	7.4%	33.3%	59.3%
6.美術製作における材料・技法	0%	18.5%	51.9%	29.6%
7.美術における批評能力を高める	3.7%	25.9%	40.7%	29.6%
8.美術作品の解釈	3.7%	29.6%	44.4%	22.2%
9.美術作品に関する歴史的・文化的な理解	3.7%	7.4%	59.3%	29.6%
10.美術における様式・影響関係と主題	11.1%	18.5%	59.3%	11.1%
11.自国の美術と外国の美術の理解	7.4%	3.7%	66.6%	22.2%
12.空間での問題解決能力を高める	0%	14.8%	62.9%	22.2%

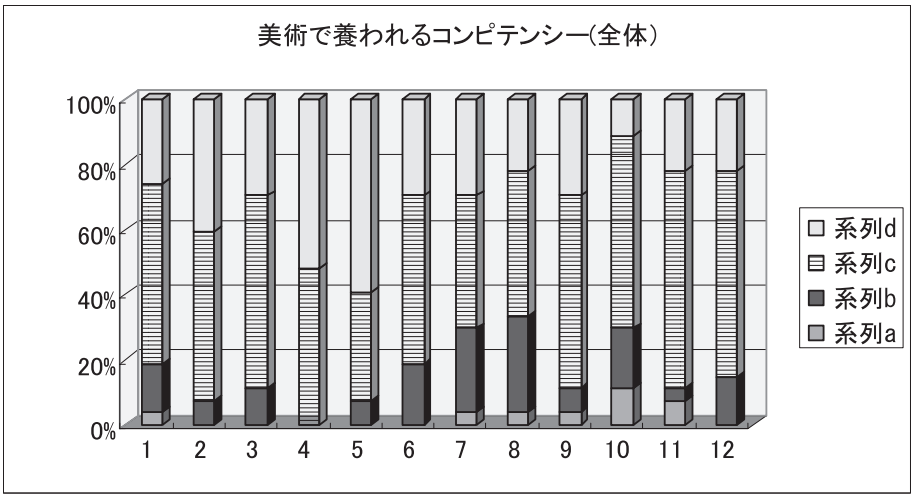

図１．美術で養われるコンピテンシーの必要程度（全体）ｎ＝27人

４、分析結果

⑴　全体の分析

表１に示したように、結果から美術の授業で養われる「能力（コンピテンシー）」で、全体（日本人、海外）では、質問１.美術製作の技能を高める」をみるとｃ（かなり必要）55.5%、ｄ（絶対必要）25.9%をあわせると81.4%が必要としているを選んでいた。以下、ｃ（かなり必要）と、ｄ（絶対必要）の合計をしめしていきたい。

質問２.美や感受性の自覚を高める、ではｃ、51.9%、ｄ、40.7%をあわせると92.6%と９割以上が必要としているを選んでいたことになる。質問３.視覚文化への自覚を高める、をみるとｃ（かなり必要）59.3%、ｄ（絶対必要）29.6%をあわせると85.9%が必要としているを選んで

いた。質問４．創造性を高める、ではａ（あまり必要ない）、ｂ（どちらでもない）が０％で、ｃ（かなり必要）48.1％、ｄ（絶対必要）51.9％をあわせると100％が必要としているを選んでいた。質問５．美術（作品・制作）との出会い、では、ｃ（かなり必要）33.3％、ｄ（絶対必要）59.3％をあわせると92.6％が必要としているを選んでいた。質問６．美術製作における材料・技法、をみるとｃ（かなり必要）51.9％、ｄ（絶対必要）29.6％をあわせると81.5％が必要としているを選んでいた。質問７．美術における批評能力を高める、ではｃ（かなり必要）40.7％、ｄ（絶対必要）29.6％をあわせると70.3％が必要としているを選んでいた。質問８．美術作品の解釈、をみるとｃ（かなり必要）44.4％、ｄ（絶対必要）22.2％をあわせると66.6％が必要としているを選んでいた。質問9.美術作品に関する歴史的・文化的な理解、をみるとｃ（かなり必要）59.3％、ｄ（絶対必要）29.6％をあわせると88.9％が必要としているを選んでいた。質問10. 美術における様式・影響関係と主題、では、ｃ（かなり必要）59.3％、ｄ（絶対必要）11.1％をあわせると70.4％が必要としているを選んでいた。質問11. 自国の美術と外国の美術の理解、をみるとｃ（かなり必要）66.6％、ｄ（絶対必要）22.2％をあわせると88.8％が必要としているを選んでいた。質問12. 空間での問題解決能力を高める、では、ｃ（かなり必要）62.9％、ｄ（絶対必要）22.2をあわせると85.1％が必要としているを選んでいた。質問７.質問８.質問10.の３項目が、他と比べ、ａ（あまり必要ない）、ｂ（どちらでもない）が多少多かった。

⑵　日本人と海外（外国人）の分析結果

表３は、日本人と海外（外国人）の分析結果を示してものである。表４は、日本人の結果、12項目を、棒グラフにしたものである。質問１.美術製作の技能を高める、をみるとｃ（かなり必要）61.1％、ｄ（絶対必要）16.6％をあわせると77.7％が必要としているを選んでいた。以下、ｃ（かなり必要）と、ｄ（絶対必要）の合計をしめしていきたい。

質問２.美や感受性の自覚を高める、ではｃ、ｄをあわせると94.4％が必要としているを選び、９割以上が必要としているを選んでいたことになる。質問３.視覚文化への自覚を高める、ではｃ、ｄをあわせると83.2％が必要としているを選んでいた。質問４.創造性を高める、をみると、ａ（あまり必要ない）、ｂ（どちらでもない）が０％で、ｃ、ｄをあわせると100％が必要としているを選んでいた。質問５.美術（作品・制作）との出会い、では、ｃ、ｄをあわせると94.4％が必要としているを選んでいた。質問６.美術製作における材料・技法、ではｃ、ｄをあわせると77.7％が必要としているを選んでいた。質問７.美術における批評能力を高める、ではｃ、ｄをあわせると61.0％が必要としているを選んでいた。質問８.美術作品の解釈、ではｃ、ｄをあわせると61.1％が必要としているを選んでいた。質問９.美術作品に関する歴史的・文化的な理解、ではｃ、ｄをあわせると83.3％が必要としているを選んでいた。質問10.美術における様式・影響関係と主題、ではｃ、ｄをあわせると61.1％が必要としているを選んでいた。質問11.自国の美術と外国の美術の理解、ではｃ、ｄをあわせると83.2％が必要としているを選んでいた。

質問12.空間での問題解決能力を高める、ではｃ、ｄをあわせると77.7％が必要としているを選んでいた。

次に海外（外国人）の結果から、ｃ（かなり必要）と、ｄ（絶対必要）の合計をしめしていきたい。表５は、海外（外国人）の調査結果12項目を、棒グラフにしたものである。質問１.ではｃ、ｄをあわせると88.8％が必要としているを選んでいたことになる。質問２.美や感受性の自覚を高める、ではｃ、ｄをあわせると88.8％が必要としているを選び、質問3.視覚文化への自覚を高める、をみると、ａ（あまり必要ない）、ｂ（どちらでもない）が０％で、ｃ、ｄをあわせると100％が必要としているを選んでいた。質問4.創造性を高める、をみるをみるとａ（あまり必要ない）、ｂ（どちらでもない）が０％で、ｃ、ｄをあわせると100％が必要としているを選んでいた。質問５.美術（作品・制作）との出会い、では、ｃ、ｄをあわせると94.4％が必要としているを選んでいた。質問６.美術製作における材料・技法、ではｃ、ｄをあわせると88.8％が必要としているを選んでいた。質問７.美術における批評能力を高める、ではｃ、ｄをあわせると88.8％が必要としているを選んでいた。質問８.美術作品の解釈、ではｃ、ｄをあわせると77.7％が必要としているを選んでいた。質問９.美術作品に関する歴史的・文化的な理解、では、ａ（あまり必要ない）、ｂ（どちらでもない）が０％で、ｃ、ｄをあわせると100％が必要としているを選んでいた。質問10.美術における様式・影響関係と主題、ではｃ、ｄをあわせると88.8％が必要としているを選んでいた。質問11.自国の美術と外国の美術の理解、では、ａ（あまり必要ない）、ｂ（どちらでもない）が０％で、ｃ、ｄをあわせると100％が必要としているを選んでいた。質問12.空間での問題解決能力を高める、では、ａ（あまり必要ない）、ｂ（どちらでもない）が０％で、ｃ、ｄをあわせると100％が必要としているを選んでいた。

表２．美術で養われるコンピテンシーの必要程度（日本・海外）ｎ＝27人

必要の程度	a（あまり必要ない）		b（どちらでもない）		c（かなり必要）		d（絶対必要）	
国別 / コンピテンシーの種類	日本	外国	日本	外国	日本	外国	日本	外国
1.美術製作の技能を高める	5.5%	0%	16.6%	11.1%	61.1%	44.4%	16.6%	44.4%
2.美や感受性の自覚を高める	0%	0%	5.5%	11.1%	61.1%	33.3%	33.3%	55.5%
3.視覚文化への自覚を高める	0%	0%	16.6%	0%	66.6%	44.4%	16.6%	55.5%
4.創造性を高める	0%	0%	0%	0%	55.5%	33.3%	44.4%	66.6%
5.美術(作品・制作)との出会い	0%	0%	5.5%	11.1%	50.0%	0%	44.4%	88.8%
6.美術製作における材料・技法	0%	0%	22.2%	11.1%	55.5%	44.4%	22.2%	44.4%
7.美術における批評能力を高める	5.5%	0%	33.3%	11.1%	44.4%	33.3%	16.6%	55.5%
8.美術作品の解釈	5.5%	0%	33.3%	22.2%	50.0%	33.3%	11.1%	44.4%
9.美術作品に関する歴史的・文化的な理解	5.5%	0%	11.1%	0%	61.1%	55.5%	22.2%	44.4%
10.美術における様式・影響関係と主題	16.6%	0%	22.2%	11.1%	61.1%	55.5%	0%	33.3%
11.自国の美術と外国の美術の理解	11.1%	0%	5.5%	0%	77.7%	44.4%	5.5%	66.6%
12.空間での問題解決能力を高める	0%	0%	22.2%	0%	66.6%	55.5%	11.1%	44.4%

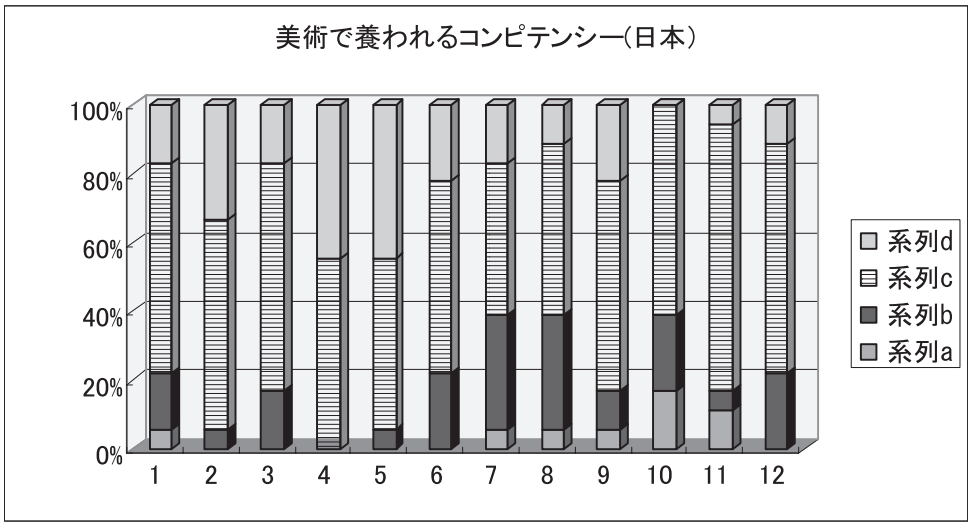

図２．美術で養われるコンピテンシーの必要程度（日本）　ｎ＝18人

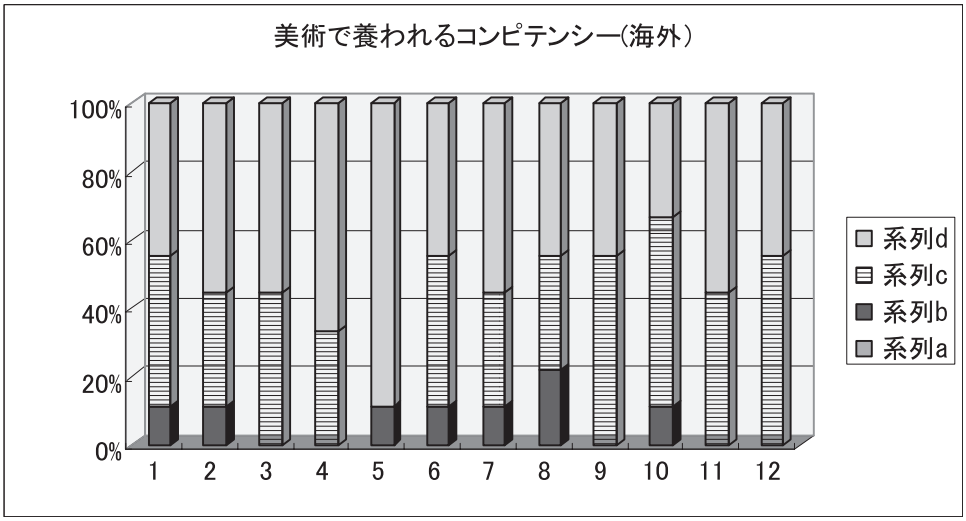

図３．美術で養われるコンピテンシーの必要程度　（海外）　ｎ＝９人

５．アンケート結果に対する考察

日本人と海外（外国人）の分析結果を比べると、質問４.創造性を高める、の項目において、100％が必要としているを選んでいた。海外（外国人）の結果では、質問３.質問.４.質問11.質問12.において100％が必要としているを選んでいた。

海外（外国人）の結果をみわたすと、これらの12項目を必要とするが多いのに比べ、日本人では、質問10.美術における様式・影響関係と主題、でａ（あまり必要ない）が16.6％と、質問11.自国の美術と外国の美術の理解、でａ（あまり必要ない）が11.1％が目立っていた。この２項目をあまり必要ないとした日本人の個別の調査資料をみてみることにした。二名は、21歳から30歳の女性で、一名は、大学院生であり、もう一名は、61歳から70歳の大学教員であった。

この調査では、必要性の程度をａ（あまり必要ない）から、ｄ（絶対必要）まで４段階で答えてもらったが、「２.上の（12項目の）質問以外で、学校の造形美術の学習で獲得するべき「能力（コンピテンシー）」に関して、あなたの考えを述べてください。」という質問も用意した。量を問う質問に対して、質を問う質問である。

日本人では、質問10.美術における様式・影響関係と主題と、質問11.自国の美術と外国の美術の理解、で、この２項目をあまり必要ないとした日本人の21歳から30歳の女性の大学院生は、「美術との出会いと興味、楽しみが生まれれば、技能、専門的な知識は自分で探求していけるのではないか」と答えており、学校で学ぶというよりも、自分で探求するものという考えであるので、あまり必要ないとしたのであった。もう一名の、61歳から70歳の大学教員は、この問いに答えていないので理由は不明である。

大学で教員養成にたずさわる現場経験の豊富な女性の教員は「美による直感力を大切にする学習が昨今ともに重要な事と考えられる。直感力をつける造形美術のあり方に、日々指導側として研究を重ねてみたいと思う」と述べている。小学校教師で大学院生という30代の女性は、「作品のできばえに、こだわらず、生徒の内にある能力をのばしていきたい」という。31歳から40歳の女性の大学教員は、「意欲・好奇心・ものに対する興味をもつこと、そのようなことに心を動かされた自分を認識する力が、造形美術の学習で身につくとよいと思います」と述べている。「美術館とは何をしているところなのか、どのような利用方法があるのかといった美術館に関する教育が必要ではないかと思います」と答えたのは、学部学生で、コンピテンシーを少し理解していないようすであった。「人間理解」と答えたのは、50歳代の男性の大学教授である。「モチベーションを継続させる力を育む」と答えたのは、40歳代の女性の大学教員である。

「美術教育をコンピテンシーを軸として考察することに理解できない部分がある」と疑問を投げかけたのは40歳代の男性の専門学校の教員である。「造形的な知識（造形要素）、漫画表現の理解、イメージ・リテラシーの能力」と答えたのは、20歳代の博士課程の女性である。「教員養成系の大学のため、子どもの心理的、身体的発達に関する知識や、それらを自分なりに捉えていく能力育成が欠かせないと思う」と答えたのは、20歳代の大学の非常勤の女性教員である。

海外（外国人）では、「芸術的体験をもっと、楽しみを増やすために」と述べたのは、40代の女性の大学教員である。「問題解決の能力を養うのが美術教育の目的の一つであると思う。問題に出会って、それを解決する創造的思考が必要と思う」と答えたのは、30歳代の男性の韓国の大学教授である。「最も重要なことは、生徒が彼ら自身のアイデンティティを理解することと、他者とのの違いを理解すること」というのは、20代の女性の大学教員であった。国籍は不明である。「生徒がよきアーティストとなること、どのようにアートを楽しめるかを学ぶこと。また彼らは美術教育を通じてわれわれの社会がどのようにアートを評価しているのかを学ぶこと」と答えたのは、30歳代の米国人の博士課程の女性である。

アンケート結果から、いくつかの傾向を見出したいと考え、傾向を分類してみようとしたが残念ながら傾向らしきものは見出すのは困難であった。

6．おわりに

調査結果を簡潔にまとめてみたいと思う。美術の授業で養われる「能力（コンピテンシー）」で、全体（日本人、及び外国人）では、c（かなり必要）、d（絶対必要）をあわせると８割以上９割近く、12項目を必要としているを選んでいた。海外（外国人）では、c（かなり必要）、d（絶対必要）をあわせると９割近くが、12項目を必要としているを選んでいた。日本人の方がc（かなり必要）、d（絶対必要）をあわせると８割程度で海外（外国人）よりも多少低かった。

最後の問い、「上の（12項目の）質問以外で、学校の造形美術の学習で獲得するべき能力（コンピテンシー）に関して、あなたの考えを述べてください。」という質問の回答からみられるように、日本人は制作を重視している傾向があるのか、質問10.美術における様式・影響関係と主題と、質問11.自国の美術と外国の美術の理解、のように、文化理解という側面では、海外（外国人）の方が必要としているを多く選んでいた。サンプリングの問題は、全27名であったことで、調査人数がもう少し多くなる方が望ましいであろう。

コンピテンシーについて本研究では調査したが、多くの部分で感性と重なる部分も多く、2008年６月に提出された、文部科学省の新指導要領には、「感性をもちいて」という表現が見られるようになり、感性を能力（コンピテンシー）とどのように関連づけるかなど今後の問題となろう。著者は、「芸術的思考におけるシンボル・システム理論とアフォーダンス理論からの『感性』の解釈と考察－イメージスキーマからみたメタファー概念とプロジェクト・ゼロの美術教育における視座」[8]という研究を行ったが、感性は、文化や、経験によっても大きな個人差がみられ、最も代表的な例としても遠近法の理解についてネルソン・グッドマンの考える、奥行きをシンボル・システムとして読みとくには学習が必要であるとし、アフォーダンス理論のギブソンと見解が分かち合っている。著者の考える、感性とは、⑴人類の歴史の中で育まれた「美」のシンボル・システムを理解する感覚および知性⑵人間の歴史の中で作り出された「芸術」のシンボル・システムの読み書きができる感覚および知性⑶メタファー思考・メタファーの使用を「芸術的」に用

いたり、理解する感覚および知性(4)感じた「美」や「芸術的」なものを、言語的・視覚的な形式で表現すること、等と考えているが、今後、感性についても更なる調査を行い、コンピテンシーとの関係も明確にしていきたい。

註

1）edit. D.S.Rychen, & L.H.Salganik,（2003）. *Key Competencies for a Successful Life and a Well-Functioning Society*. Hogrefe & Huber Publishers.（立田慶裕二監訳『キー・コンピテンシー　国際標準の学力をめざして』明石書店　2003年）

2）拙稿、「PISA 調査で測れない美術教育で育まれるキー・コンピテンシー…美術科教員養成におけるスタンダーズの基礎として…」『福井大学教育実践研究』　2007年，第32号．pp.1－6.

3）ふじえみつる「美術教育にための『能力』観の研究」『美術教育学』第28号，2007年，pp.335－346参照。

4）Op. cit.,　2）pp.1－6.

5）第32回 InSEA（国際美術教育学会）大阪　世界大会は、2008年８月５日から、2008年８月９日に大阪国際交流センターにおいて開催された。海外からの参加者は、米国、英国、フィンランド、オーストラリアスウェーデン、中国、ドイツ、オーストリア、スペイン、韓国、台湾、ブラジル、カナダ、ポルトガル、インド、マレーシア、フランス、スイス等であった。

6）ふじえみつる「全米美術教育基準の成立とその課題について」『美術教育学』第25号，2004年，pp.383－397参照。

7）"Scope and Sequences coded to the National Standards"（1999）．The Getty Education Institution of the Arts.

8）拙稿、芸術的思考におけるシンボル・システム理論とアフォーダンス理論からの「感性」の解釈と考察－イメージスキーマからみたメタファー概念とプロジェクト・ゼロの美術教育における視座－『美術教育学』第30号，2009年．美術科教育学会（査読通過）

［アンケート用紙(日本人用)］

次のアンケートにご協力ください。

福井大学　池内慈朗
itsuroik@edu00.f-edu.fukui-u.ac.jp

美術の授業で養われる「能力(コンピテンシー)」について調査しています。項目で該当するところをチェクまたは、記入してください。

［性別］ □男性　□女性
［年齢］ □～20　□21～30　□31～40　□41～50　□51～60　□61～70　□71～
［勤務先］ □幼・保園　□小学校　□中学校　□高等学校　□専門学校　□大学
□学部学生　□大学院生　□その他（　　）
お名前＿＿＿＿＿＿＿＿メールアドレス＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

1、美術の授業で養われる「能力(コンピテンシー)」について次の質問にお答えください。
a から d の段階でチェクまたは、○をしてください。

	あまり必要ない	どちらでもない	かなり必要	絶対に必要
1.美術製作の技能を高める	a	b	c	d
2. 美や感受性の自覚を高める	a	b	c	d
3.視覚文化への自覚を高める	a	b	c	d
4.創造性を高める	a	b	c	d
5.美術（作品・制作）との出会い	a	b	c	d
6.美術製作における材料・技法	a	b	c	d
7.美術における批評能力を高める	a	b	c	d
8.美術作品の解釈	a	b	c	d
9.美術作品に関する歴史的・文化的な理解	a	b	c	d
10.美術における様式・影響関係と主題	a	b	c	d
11.自国の美術と外国の美術の理解	a	b	c	d
12.空間での問題解決能力を高める	a	b	c	d

2、上の質問以外で、学校の造形美術の学習で獲得するべき「能力(コンピテンシー)」に関して、あなたの考えを述べてください。

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

ご協力、有難うございました。

［アンケート用紙(外国人用)］

Questionnaire

The purpose of this survey is to research “Competency” in art education.

Professor Itsuro Ikeuchi（University of Fukui）itsuroik@edu00.f-edu.fukui-u.ac.jp

[Gender] □Male □Female

[Age] □～20 □21～30 □31～40 □41～50 □51～60 □61～70 □71～

[Employment(School)] □K □Elementary □Middle □High □College □University

□Undergraduate Student □Graduate Student □Other（ ）

Name_____E-Mail:_____

Task 1: To study “Competency” in the art class in compulsory education. How much degree necessary in these competencies in art class? Please choose one and check it.

Not necessary—a Not so necessary—b Considerable need—c Absolutely necessary—d

1.increase skill in making art a b c d

2. increase aesthetic awareness a b c d

3.increase visual culture awareness a b c d

4. increase creativity a b c d

5.encounters with art（artworks・art making） a b c d

6.materials and technologies in art making a b c d

7.increase skill in art criticism a b c d

8. interpretations of artwork a b c d

9.histrical and cultural contexts of art a b c d

10.styles, influences, and themes in art a b c d

11.understanding own country’s art and foreign art a b c d

12.increase spatial problem solving awareness a b c d

Task 2: Besides an upper questions, what is your opinion about abilities/competencies that can be achieved through art education in the school.

_____

_____

_____

Thank you very much for your helping.